

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム	申請大学名	東京大学
申請大学長名	濱田 純一		
プログラム責任者	萩谷 昌己		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期間の内に様々な準備を行い、プログラムを開始し、着実に歩み始めている。 ・しかし、まだ初期段階であり、また学生との意見交換でいくつかの懸念材料が明らかになったので、「2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）」に示すように様々な制度設計や改善が必要である。特に、学生採用実績が予想したよりも情報系中心になっており、情報系以外の学生に対するきめ細かいケアと分野横断プログラムの特長を活かした学際融合を促進する工夫が必要である。 ・入学した57名の学生の内訳をみると情報系（情報理工学系研究科及び学際情報学府）の学生が圧倒的に多い。もう少し、多様な学生を確保するためにも、他部局へのアピールが必要ではないか。 ・インターンシップについて、本プログラムで採用される方式が企業のカルチャーと一致するのか、心配な面がある（大学がテーマを決め、かつインターンの費用を負担することで、活動中に発生する可能性のある知的財産権の帰属問題を解決しようとする制度など）。 ・グローバルデザインワークショップを見学したが、英語で活発な議論が展開されており、将来性のある方式のように感じた。 ・後述のとおり、学生の意見を踏まえ、もう少しきめの細かな学生対応（特に情報系以外の学生）が必要と思われる。 ・学生の自主性に任せる教育方針のようであるが、最初はやはり様々な支援が必要と思われる。 ・多数の著名な教員が参画されているが、本プログラムのミッションが十分に理解されているのか、積極的な関与を約束されているのか、少し心配な面がある。学生はプログラムの特定教員のみならず、著名な教授層との交流や指導を望んでいるようである。 			

2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- ・ヒアリング時には、修士や博士の学位審査基準は本プログラム独自（論文件数などによらない）のものを採用するとのことであったが、これは最終決定事項ではなく、今後学生の所属部局との協議によるようである。この点も早い時点で明確にしていきたい。
- ・本プログラムの終了後の持続性について、発足当初より関係部局や大学当局と十分意見交換をしておいていただきたい。教育プログラムであり、予算支援される7年で終了では学生が困るので、長期の時間軸で是非考えていただきたい。本プログラムの支援期間終了後の継続の主体がソーシャルICT研究センター（現在は主に競争的資金での運営）のみでは弱いのではないか。
- ・ある米国の人材育成プログラムでは、物理系人材の育成が重要との意見もあるが、参考にされてはどうか。
- ・情報理工学系研究科のプログラムの色彩が非常に強い。プログラムの謳い文句はよいが、入ってみると「情報理工」の色彩が強すぎるので、戸惑っている学生も見られた。もう少し学際的な人材育成を前面に出した方がよいのではないか。また、東大のホームページから本プログラムがアクセスできるようにすべきである。
- ・学生と著名な教員との接点があまりにないように見受けられる。情報理工学系研究科以外の部局の学生には、きめ細かな指導をする意味からも、副研究指導教員を1、2名指定して、普段から自由に研究室に出入りさせる方がよいのではないか。
- ・学生側からみると情報理工学系研究科の目線でプログラムが進められているようで、情報技術等に不慣れな他専攻の学生の中にははじめからついていけない学生もいるように見受けられる。交流の機会も少ない現状では学生自身の努力による解決には限度があるようなので、この点からも情報系の教員を副主任指導教員としてつける等のきめ細やかな対応の検討が必要ではないか。
- ・学生の日常的な居場所をもっと学際的に確保する必要があるのではないか。情報系以外の研究科からの参加学生は1名～数名のところが多い上に、異なる研究科の学生同士が交流する機会も十分に用意されているとは言い難い。土日にはグローバルデザインワークショップなどで学生が集まれるようになってきているようであるが、現時点では分野横断型のプログラムのメリットが十分生かされていないという印象を受けた。
- ・プログラムの趣旨を学生に徹底させる意味も含めて、例えば、多数の教員との1泊2日程度の合宿などの工夫も必要ではないか。5年一貫のプログラムについての理解も徹底されていない面もあるようである。博士前期課程2年次において20名に絞ることやランク化された奨励金についても十分に理解されていないのではないか。
- ・プログラム立ち上げ時期の過渡的問題の可能性もあるが、事務体制が十分ではないのではないか。例えば学生には評判の良い英語講義などでも、シラバスなどの配布など学生への情報伝達が遅れているようである。
- ・博士課程後期に実施するインターンシップの紹介先なども情報系主体であり、博士後期課程進学に悲観的な学生も見られた。現在JICAなどの新たな紹介先を開拓中とのことだがまだ不十分と思われ、インターンシップを重要と位置付けているからには、多数の部局の教員の連携と協力が必要ではないか。
- ・学生は活発であり、意欲が十分あるので、失望させないように、参加教員全員がプロジェクトの意義を再認識して、取り組む必要があると思われる。
- ・東京大学であればこそできる教育プログラム改革であるので、新しい大学院教育のロールモデルとして全国に波及させていきたい。